

審査の結果の要旨

氏名 モーセン モスタファヴィ

本論文は、建築（project）の設計から建設という過程を経て竣工に至るまでのプロセスと、書籍（book）の構想から執筆、編集という段階を経て印刷されて書籍として完成に至るまでのプロセスを重ね合わせ、“The Book as Project: Architecture and Education at the Intersection of Theory, Practice, and Urbanism”という主題の下で、建築の理論・実践・アーバニズムについて論じたものである。書籍と建築のアナロジーを出発点とすることで、理論・実践・アーバニズムの3つの観点を、建築教育における重要な論点としてとり上げ、それぞれ第2章から第4章のなかで具体的勝詳細に論じられた。建築理論、建築史と現代建築の実践のつながりを論じようとした研究は過去にも多く存在するが、本研究はそれを「建築教育」という観点から論じた点で、きわめて重要な研究といえる。

本論は「序文」「第1章：イントロダクション」「第2章：理論」「第3章：実践」「第4章：アーバニズム」「第5章：結論」からなり、巻末に「補遺：建築教育の未来に関する対話」を加えた構成となっている。

本論文の枠組みを支えているのは、著者自身がこれまで20年以上にわたって執筆・編纂してきた多数の研究プロジェクトの成果としての書籍である。それは、単にこれまでに発表してきた論文や著書が、各章の原形になっているということではなく、それらの既発表の書籍自体が、本論文が主張する“Book as Project”の実践となっている。本論ではそれぞれ「理論（第2章）」、「実践（第3章）」、「アーバニズム（第4章）」の主題に沿った自身の編著書がとり上げられながら、それぞれの書籍や書籍内の論文で論じられた内容を具体的に整理すると同時に、それらの書籍の理論的な位置づけ、建築教育上の位置づけが論じられている。以下、各章の内容を概観する。

「序文：プロジェクトとしての書籍」では、主として“Book as Project”という本論文のタイトルが何を示すのか、理論的かつ思弁的に論じられている。「書籍」と「プロジェクト」という、本論文の鍵概念である両者は、「本と建物」、「理論と実践」、「構想と実現」といった対比的な概念であると同時に、相互に関連する概念であるという点の本論文においては重要である。

「第 1 章：イントロダクション」では、改めて本論文全体の理論的な枠組みが示される。建築における書籍の構想は、建築プロジェクトの実現と重ね合わされ得るものであるという観点から、本章では特にアメリカにおける現代の建築教育における理論と実践の関連性が、「デザインスタジオ」「建築史と建築理論」「技術」「メディアと表象」という教育上の 4 つの核と、それら相互の関係性のなかで論じられた。

「第 2 章：理論」では、*On Weathering: The Life of Buildings in Time* (1993) および *Surface Architecture* (2002) の 2 冊の書籍がとり上げられ、建築理論という分野が建築学において有している意義が論じられた。具体的な建築理論上の観点として本章で論じられるのは、「時間」と「被覆」の概念である。建築における（継続する）時間性と一過性の概念が、建築の表層における風化という現象によって明らかにされ、さらにそこから現代建築における表層と被覆の問題が、テクノロジーと美学という両極の観点から論じられた。

「第 3 章：実践」では、現代建築における実務の問題に焦点が当てられる。ここでは *Approximations: The Architecture of Peter Markli* (2002) と *Structure as Space: Architecture and Engineering in the Work of Jürg Conzett* (2002) の 2 冊の書籍がとり上げられ、それぞれ建築家のペーター・メルクリ、構造エンジニアのユルグ・コンツェットという 2 人が事例として論じられた。これら 2 人の建築作品やその実務を通して、この章では建築作品と建設行為の相互関係について、多様な観点から論じられている。さらにその議論は工学、建築、ランドスケープ、インフラストラクチャへと発展し、より広い社会的、政治的、空間的な文脈のなかで、建築を位置づける試みとなっている。

「第 4 章：アーバニズム」では、*Ecological Urbanism* (2010)、*In the Life of Cities* (2012)、*Ethics of the Urban: The City and the Spaces of the Political* (2017) の 3 冊がとり上げられ、現代の極度な都市化のプロセスが生み出すさまざまな問題と、それを理論と実践によって解決する可能性に関する議論が行われた。特に本章において重要なのは、著者によって提唱された「エコロジカル・アーバニズム」の概念であり、この概念がランドスケープとアーバニズムの相互連関によって考察されている。従来の建築論においてはビジュアルなコミュニケーションが主となりがちであったことに対し、アーバニズムの問題を論じることによって、空間・社会・政治的な枠組みのなかで建築と都市を論じる方法論が提案されている。

「第 5 章：結論」では、以上の議論を通じて、高等教育機関における建築学教育が理論的、実務的、そして地理的に位置づけられ、現代的な建築の世界性 (worldliness) やグローバルな思考形態の構築のために必要なものであると結論づけられた。

以上のように、本論は著者自身による長年の建築・都市の理論と実践に関する研究成果を、現代における建築教育という観点から理論的に論じたものであり、建築理論・建築史分野の研究としてきわめて重要な成果をあげたものである。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。

以 上